

エルサレムの小さな窓

市川 裕
(昭和53年修士修了)

城壁で囲まれたエルサレム旧市街は、四つの区域に分かれていて、その一角に、アルメニア人という民族が住んでいる。今、人口は500人とも、

800人とも聞いているが、全員キリスト教徒である。「さまよえる民」の代表はユダヤ人、と相場が決まっているかと思ったら、実は他にも境遇の

酷似した民族がいるものだというのが、アルメニア人を知ってからの感想である。

アルメニア人が住んでいる区画は、周囲がほぼ完全に壁で囲まれていて、私の知っている限りでは、入口は二つしかない。一つは教会に通じている主要門、一つは博物館への入口である。この主要門と道路を隔てた向かい、したがって壁の外に、小ぎれいな土産店兼電気製品販売店がある。その主人は、30代中ばの人で、日本語を話す。額がやや薄くなりかけて、口ひげをたくわえ、人なつこそうな丸顔の、ちょっと腹の出た人である。名を春人という。勿論、本名は「復活」という意味のアルメニア語であるが、その一部を日本語風にもじったわけである。二、三度、本名を聞いてみたが、覚えないうちにすぐ忘れてしまうので、今もって知らない。春人さんは日本語を話すだけではなく、歴とした石川島播磨の社員であるという。エルサレムのこの区画に住んでいる同輩のアルメニア人の閉鎖性には批判的で、現在、オーストラリアへの移住を計画し、既に市民権の申請を終えその結果を待っている。以下は春人さんの話。

アルメニア人は、現在、米西海岸やニューヨークに数十万人の大きなコミュニティをもっていて、それに比べると、イスラエルじゅうでもせいぜい1600人程度だという。昔は皆、トルコに住んでいたが、1891—1915年にかけて断続的にトルコ人の暴動を受け、50万人が死亡した後、1915年にトルコ政府主導の虐殺で150万人が死亡、春人さんの曾祖父母は死亡、当時まだ少年だった春人さんの祖父はイスラエルへ逃げたという。春人さんの祖父の世代は、今でもトルコ語以外はほとんど話せないという。

エルサレムのアルメニア人は、現在、ヨルダンの市民権をもっていて、イスラエルのではないそうである。他の旧市街居住者も概ねそうで、一部にはイスラエル市民権保持者もいる。アルメニア人は、生活する上で、最低でも四か国語（アルメニア語、アラビア語、ヘブライ語、英語）を知っている必要があるの、それらは学校で学び、他に祖父母と話すためにはトルコ語、また、春人さんのように仏語系の学校へ通うと仏語が追加され

る。この人の場合は、さらに独語と日本語が少々、否々かなり、ということになる。

ヨルダンが旧市街を支配していた頃（1948—67）には、生活そのものが単調で、それだけに楽だったが、刺激も少なく進歩がなかった。イスラエル支配になってからは、とかく税だ何だと頭を使う毎日だが、この国は自由なのがいいという。欧米人の観光客も67年以後は格段に増え、そういう観光客を相手にするうちに、アルメニア人やアラブ人キリスト教徒の若年層は賢くなってきたという。

春人さんは、71—76年までレバノンに滞在し、AUB (American University of Beirut) に学び、75年に起こった内乱を体験。AUBは野戦病院となり、両軍の負傷兵が来る中立地帯で、城外では戦闘あるも、城内は平穩無事の毎日を過ごした。その頃の話をすると実に楽しそうである。卒業後、ベイルートの石播のオフィスへ入り、指令によりアブダビやサウジ等の湾岸諸国へ派遣され、80年には、三か月ほど日本へ行ったという。以上。

イスラエル国防軍は独自のラジオ局をもっていて、ガレー・ツェハルと呼ばれる。今は亡きガエル・ヤディンが軍の総司令官だったときにこれを設置したといわれる。ときどき、十数回のシリーズで市民大学講座の番組を流している。この国の学問的関心がいくぶんわかるかもしれないので、参考にこの5月から8月にかけて行われた講座を列挙してみると、次のようになる。

「中東の少数民族・少数宗教集団」(日)

「ビアリークの詩とその解釈」(月)

「イタリア・ファシズムの歴史」(火)

「人間の夢と記憶？」(水)

「ユダヤ思想史における善と悪の問題」(木)

ときどきは聴くようにしているが、なにせヘブライ語なので、しばしばちんぷんかんぷんのまま30分が過ぎてしまう。運よく、たまたま聴いたときに、アルメニア人の話をしていた。以下はその要点。

アルメニア人は既に紀元前から存在が知られていたが、四世紀の初頭にキリスト教を受容してから、ひとつの明確な民族集団、文化集団として急激に発展する。さらにその百年後には、アルメニ

ア語の新しいアルファベットが作られ、新約聖書を翻訳し、文化の基盤が確立した。アルメニア人は印欧系の人種、印欧系の言語ゆえに、中東地域ではほとんど常に少数派で、他民族の圧迫に苦しむが、十字軍の頃、アルメニア帝国がイスタンブール近辺に一時勢力をもった。これも、十字軍後退とともに弱まり、イスタンブール陥落後はオスマン・トルコの支配下に入る。アルメニア人の故国はアナトリアであるが、早くから中東全域にコミュニティ網をめぐらして、通商、貿易、通訳などの仕事に携わっている。

19世紀末にオスマン・トルコが衰退しはじめ、ロシアや英仏などのキリスト教国が侵入するに及んで、アルメニア人は独立国家建設の夢をもつが、期待していたこれらの先進国からは援助が得られず、トルコ人からは亡国の敵とみなされ、暴動のえじきとなり、ついに、第一次世界大戦に至って、トルコ政府きもいりの大虐殺で百万人以上が殺害され、生き残った者は、世界各地へと離散した。以上。

これら二つの話から、歴史という過去の遺物が急に巨大な現実となって目前にせまってきたような印象を受けた。トルコを放逐されたアルメニア人の運命は、わずかその四半世紀後に東欧のユダヤ人をおそった運命を予兆するかのようである。また、アルメニア人のテロリストがトルコ大使館を襲った、などというニュースをとときき聴くが、「ああ、それは、この虐殺に対する報復なのか」とため息をついてしまう。

勿論、エルサレムのアルメニア人が、特別に、「歴史を荷って生きている」民族かという、そうではない。ごく普通の人たちが、日々を黙々と過ごしているだけである。ときには、「ひっそり」と形容したくなるほどだたない存在である。それが、あるとき、何心なく生活をのぞいて、歴史のページをめくってみたら、そこには思いもよらない世界が広がっていた。その驚きは、荒れ果てたあばら家の小さな窓をなにげなくのぞいてみたら、豪華な宮殿の広間さながらの部屋に、思わず息をのんだ、そんな驚きに似ている。それと同時に、眼を未来に向けたとき、世界じゅうに散った

アルメニア人たちはこの先どうなるのだろうと考えると、また、途方もない驚きにおそわれる。

驚いてばかりもいられない。最後に、アルメニア人の歴史に関連して、少し気のついたことを記してみよう。当然のことながら、キリスト教の威力の大きさを否定することはできない。今日に至るまで、実に1600年もの間、これによってアイデンティティを守り続けているわけである。それはまた、アルメニア人に限らず、コプトしかり、エチオピアしかり、シリア教会しかりである。その中でも、アルメニアの場合、キリスト教が民族の統一を強固にし、文化発展の踏み台を作ったという教訓から、古代日本における仏教の影響を思わないわけにはいかない。特に、日本国じゅうに国分寺と国分尼寺を建立した頃の人々の驚きが伝わってくるようである。そうであればこそ、なおのこと、神道が、華麗で優美な仏教美術をま近にみながら、決して神々の像を造らなかつたという事実、改めて驚きを感じず。

ところで、アルメニア教会をはじめ、エルサレムの少数キリスト教諸派のキリスト教は、多分に「儀礼的」である。袈裟を着た僧侶のみが日に二回、30分ほどの読経ならぬ祈りを行う。堂内に香が焚かれる（シリア正教の場合）。ろうそくに火をともし。祭壇はきらびやかで、お寺の華やかな仏壇といっこう変わらない。一般信徒が、どれくらい宗教に熱心かどうか知らぬが、積極的でないことは確かである。日々の祈りに一般信徒の出席はなく、すべてをお坊さんに任せているふしがある。旧市街の雑踏を避けて、細い迷路を白石の壁づたいに右に左に進んでいくと、人通りの途絶えたあたりに、ひっそりとたたずむ祈りの部屋に出くわす。そっと中をのぞくと、少人数のお坊さんたちだけが読経している。ここに見出せるのは、攻撃的なキリスト教ではなく、ひっそりと伝統を守り続ける宗教である。ヨーロッパ人のキリスト教とは、一味も二味も違う中東のキリスト教に触れてみて、むしろヨーロッパのキリスト教の方が特異なものに思えてならなくなった。

聖金曜日に聖墳墓教会に行った。イエスが十字架の上に死んだ場所とされている。紫の衣に身をつ

つんだシリア正教の坊さんたちの儀式をみていたら、そばに立っていた老婦人がそっとささやいた。ディス イズ ノット ザ クリスチャン スピリット バット ザ ムスリム スピリット。小

柄ながら、かくしゃくとしたこの人は、ドイツから来て、今はエルサレムに住んでいるとのことであつた。